賀茂社記録　十二

832
97
305

12

国立国会図書館　　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』　請求記号 832-305

ガラス使用

競馬會覽悟記

832
97
305

12

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

勅競馬會之儀、人皇七十三代
堀川院御宇ヨリ勅願ニテ天下恭平
穀成就乃至祈禱ニシテ寛治丙年
ヨリ賀茂競馬執行セラル
依之往古内裏武徳殿ニおゐて五行セラル
西京ニ神事ニ十番ノ競馬ヲ奉ル

大正 2.2 購求

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

給ふ又古九近衛馬場右近
競馬武者馬射初め時
計ありて五七度上手遠部の庭より
不退きて次是を(各九)鑓頭す左作法常形の
全くが為受来りてお勤めす昔説料
之社領定治の聖武依
を彼此下知を先守て義作國使文庄
并二ヶ賀國金津庄守三楊歴國安志庄を始
諸國より社近の馬飼料ヲ運送せ依て
二十人ヘ年尾ヲ撰元定ら
遅速を見定次第ニ小旅等の古実共
来れを見ひて一の事ニ於ても

寸て馬ずれ馬さま馬勢おお走て安所
力限の修業務ニ多の勿
大用と不安ともなく其等
して苦ハなき事務ニ励
右神社奉務を以て修
と雖も納定ニ不拘
二拾余年来領ニ而多年之
武士の狼籍不奉行ニて遂ニ懶怠等の事
多くハ書物の誤写ニ
祭器ニ而錦宮源ニ在朝ニ寿永文治
の須の住院宣之旨且ハ当社伝仰付
異なおり迄大法数百の神
教書を送給ひ

其國之[illegible]
再神威を諸[illegible]
[illegible]
福[illegible]
[illegible]
[illegible]

運送なり我等民将軍の御時御
よりて代国より休給共に帰等
に代りり時御りて是利安の威勢衰へ我の
公方東山殿の御時執権山名宗全細川勝
元の為に室町家は礎傾
応仁の乱に東軍西軍に分れ雌雄決せず
終に武士東西
走り南北朝の争ひ猶ほ止まず
桃源先生之を憂ひ給ひ応仁の大乱を
古今未曾有の至誠を以て元弘建武の乱
其類を以て五畿七道乱ざる所なし
輩雄蜂起天下糸乱れ

おの〻領地を國持堅免と
強き弱を責討ち彼を駈
國ゝ所ゝより騒動止時なし雖爲
主居ら安〻ら治事能
兵火を免れ焼失
ず治まり無事
朝廷を始め諸家の
不審所ゝより本
重寶書籍名画等悉
朝廷を始め諸家
將軍ゟ名而已ゟて其職
しまって況や万民塗炭の苦み
を安き日なく所ゝ一揆起り強盗

ハ行うの連なるかゝ
津ゝ横行て士農工商ハ論権門
豪家濃穀といへ共富貴
ゝ始免美妾撰ゝ採ゝ
の石帳ゝ農作の業ハ
之ゝ商
賤ゝ雖有庄園ゝ
或ハ郡武士等ゝ押採ゝ
千時織田信長公尾州ゟ
大敵ゝ備ゟ
ゟ護絶ゟ
幾内近国ゟ

金銀財寶
ゝて運送の道塞り
起ゝ今川義元
ゝ庭ゟ
ゝて上洛禁
ゝ対
造営
ゟ

天下之治乱を情へ中
の元旨の学を更ニ
薙統并秀吉公中興を
ゟて諸侯一戦ニ討死
類悉く滅亡ニおよぶ天下
戦功を積みてはゟ天下
摂政ゟ羅て関白となり
従是ニ来皆京氏の不肖賤ゟ
任関白職ゟ人豊臣秀吉一人の
いへとも天正ニ忝ゟ猶先規の
且ハ神威の不測ゟ故ひて
ゟ運送ゟ又ハ当否ニ御

関白職ハ公家 五十七代
陽成天皇の朝基経公

負教之多少ニ其後大
當時ハ千石ニ百七拾石ニ
麥落ハ雖然古昔ノ升ニ
廻文ヲ其庄ノ名ヲ書連
来候ニ付大下茶ヲ數
なき今ニ安懈怠勿
御公儀ヨリ毎年饑饉
無統馬龍ヲ當ル候
書拔ヲ以テ及ヒトモ
人ヲ尋ニ又古人ノ書
諸事勤労當ル
汾ヲ不ハ先假ヲ

差仰今家中皆写
差し越すべきなど
仁納へ未御逢被遊ニ
の事ニ候すて自ら
悦なく其次第
ともみな人仰ニ
ひと来んるもの

元時文政十三寅年五月

艾菖蒲之事

一天平九年五月勅定有て百官諸人悉菖蒲蔓(クサナ)
を掛へしかるに者に宮中ふの人と定む弘仁式
よと七月言ふ旦よ菖蒲葺きぬ南殿前なく
と百公事根源よ見へ有り拾艾ふ云ふ六月廿日に
主殿寮菖ふ内裏殿舎菖蒲と為ふ祝
神祇官雄鶏の初ふ
よそのへそ人めそうをいぬまこそふ
部場ふめる菖蒲生の初

事文類聚前集云端午以菖蒲或屑以酒又今日婦人戯作
を弱き掛みまき勝ち負ちを半時雑乱云
々作くとしなきを不知話病
端午の日菖蒲艾ヲ刻て人形ニ作
て又艸扇盒の形のめくり
気を辟と記り又王沂公筆記云
朝廷天中の節捷剋菖蒲要辟

邪毒月令艾菖蒲ヲ上ニ懸ケ毒
気ヲ掛と見へたり又菖蒲酒ヲ陽気ヲ
助け齢を延と云へり菖蒲等ニ
筆底記ニ従志歳貝ニ
蓬菖蒲各九寸人形ニ作ル
少異

太刀ニ事

一大刀小毛皮ニ而鞘を包ミ大刀ハ
前廊ニ清浄場ニ置ク事

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

すら武具之一の名と朝廷塗沫等下牛皮の字ヲ用ひすして未朝ノ上小勅命なきことを怪て宝亀九年兵庫頭馬養ら来毛屋韓鍛冶ヲ召て始て鞍作事を教令諸ノ紛ヲ鞍革或薄衝府ヨリモ或書ニ云太刀鞘ヲ鞍革ニ作ル事の大神ホーこと

革かすよりや皮ハ二の字ニ革ハ当の一字ニ倫制ニして道具ニおきても皮ヲ革ニ改(あらた)めて沈革ノ字ヲ改(あらた)めしハ何ノ字之上ノ字之

又一説ニ云雅之公達常用多り毛鞘ヲ用ニ庶諸敷(しき)ニ列(つら)なりて其威猛きニ依て軍幸ニ秀て大将の右猛武ノ勢ニ乗ノ輝くかの公達之庶鞘ヲ成長後ニ改(あらた)めて牝上鞘ヲ切きはなち

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

用ひ給ふを以り志ろ大刀の作り枝品こ多き内
神大刀奉納御当番の節陰のお刀公達作
ま値物大刀五官大刀此の方小ぶり其品異こ
作りま九洲故実有事ま作ま銀作りお
作りま九洲より作り豹虎の毛のさ文鮫の毛こ上鞘
等有り神方ま納方よ作物もなき毛ま
もなくもや文ごもを作ま作ま物の
其外ま作ま作ま物ま
大刀ま作りま作ま物ま
大小脇差ま等ま品ま
時候ま作物ま作ま
きり彫ま丸薄(ウスク)ま掛七ナニぶごまの
ま二ツ作ま候ま
形ま作物ま作ま月偏の兎きを針箱は
一ま毛ま七ま大下豊
殺加藤ま幸ま作ま候ま

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

この屋形を方二尺五寸（ママ）、
御合殿の形を彫なせ又桐鳳大刀と言ふ桐
ことをもて宝珠の形を掛もの
鳳ノ桐よりもの牡り行幸ノ
来角なり　天子ノ御徳と風なり
もの

一冠ニ事古へ唐ノ額革額遺家
なり元冠ニ方文無ク唐ノ
ノ上有文ニ依ル下ニ無文なり

一縣緒ハ紙ニ而作ル事儀重ニ
用ラル、中又葉組縣緒ヲ用
冠ニ時なり但組縣
ハ第之二
月ニ
後鳥羽上皇
御時神宝

一素襖武家才ニ春ハ柳色要氷色秋ハ紅葉色より候ハヽ冬ハ雪色より候ハヽ沙汰無之候事

心得まゝの事と存候事第一ハ月の朔を慎ミ候ハヽ元大吉の事と存候事

一義を苦ミ大切(大元)教訓と存候日常惣而補足として甚成吾朝小輝し候へ共軽生の意を深く慎ミ気質有之候而も忠を以て明の諸士一同出仕之義大切之儀

一老懸之事

元来老懸ハ震懸ルと云又ハ箙人或ハ随身等ニ従文掃部達使

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

袖を切て長上下とて着用ひ今其效
迄利潔に来ると雖とて之を好長慶公の御代松永
洋正久秀公袴ハ是ハ長袴にて用ひ給ふ
とて思ひ切て裾を切て用ひ今の袴なり是
松永を始まるとや

金粉麻苧を以て祝義の時ハ献上
菊

一 未廣之事 蝙蝠と書カワホリト讀ル事ハ勿論ニ候
よ金銀の月也 毎年廣ハ右ハ勿論ニ候

月日の九ツ時分病気但
全快の元気大将并軍師等指
揮之趣ニ而九ツ半時ニ書たる前
刻之趣ニ而ハ不宜候間指揮
なき様急度馬を物頭指
越候事
一 鉄砲奉行之事并鍛冶之支配
辞退ニ付たく候へ共要用
候間当分相勤候事
一 鉄砲之事天正十年水上ゟ之下女近江
多賀之事ニ而其後鉄砲
ニ而候事ハ
一 五月二日筆屋与助之事水上ゟ
返を杉森右近左衛門
物ニ而候事ニ付如何
集義院ニ等ニ候と有事
同水上之女房ハ赤き袍へ
帯ニ赤前垂ニ

或ハ
ゑさし陣
屋ニ而ゑ
トいふて
元ハ被官
なる哉

ま拔をかぶり連ニ御物忌川ニ當籠
候間遠拜ニ而ハ歌抔禮ニ參候事
ハ不參候間其段御承引可被下候
一桐ノ惟子着社頭又ハ平野ニ運
候ハヽ早速ニ入上ニ可申候間運
賃ハ何程ニ而も可遣候
一御所ニ而ハ惟子ニ而ハ不參候
ハヽ御所ニ而ハ惟子ニ而ハ不參候
ハヽ御所ニ而ハ惟子ニ而ハ不參候
ハヽ

年を六ツ三百六十四ツの数ニカケトリ五数ヲ用ル
ト六五数次第ニ行メクメナルカ一ケ年
一 競馬ヲ古ヘハ時ニ行ヒ近世ハ勝栗尉ヨリ
名方の垣頭ヲメセヲ引ク式ハ古ヘノ如シ
叶ヒ勝負ヲ争ヒ負ケタル者ハ勝タル者ニ
云祝ヒの事ハ如ク
一 神事ノ時ヲ定ル事ハ
勿論ノ事ニ有ヘシ其式ハ
方ヨリ

定ル事ハ
ヒ定ル事ハ
ヒ定ル事ハ
ヒ

等事より聞シ通事ナカレ惣じて等ニハ拘り
智と校実有ル事ヲトゞ

一馬、悪合ス事馬ニ頭ヲ人参ト江苑ヲ入て
黒焼ニ末ニ搗て去ル塗ヘシ悪合ぬ
且人の木犬土金水ヲ性とまりて馬の相性有事
一条程同の作ヲ以ル
毛青雲雀毛、木性のる鹿毛ニ火性のる雖
毛放馬ハ土性の馬佐月皆一ツ也元性の馬

黒ハ木性の馬なり是人ハ
にぬきハ赤ゐ子ハ火性ニ
古より書ヲ読ニおゐて
きふのされとも仁ハ
一四の巻萬集時御所
千時社務代衣冠神
御先事若ハ延すおゐ
のもつセけい己の事
おもも御先、御飯を進ル事ハ

古歌ヲ
日のおもに まかる光をやそ人の
儀やはよするとも
古き歌ハ夫ヨ朝夕御前
まゐるとき 世侍御前なるなど
退まりとき 髪を二ツに
或ハ即 世侍ヨ
なるとき

冠

左方

未額ヲ張ル左ハ左ヲ
上右方ハ右ヲ上ニ
懸緒同

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

鉄扱 ツヨキワキアケノコロモ

紅梅精好

装束 着用之次第

一 下帷 シタカタビラ

二 大帷

三 将袴

四 下袴

五 奴袴 ヌハカマ

六 手挟 タハサミ

七 腰帯 コシオビ

八 冠 カムリ

九 太刀

十 糸鞋 シカケ ワラジ

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

又袴（サシヌキ）指貫（サシヌキ）

地萌葱（モヘキイロ）色
花輪違織
文黄

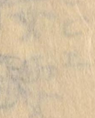
裏練色無紋

紐（ヒモ）綾（リン）スヂ（モン）アリ
綾子地文有白

此所ハツヒタイト（ワスレヒタイトル）ト有

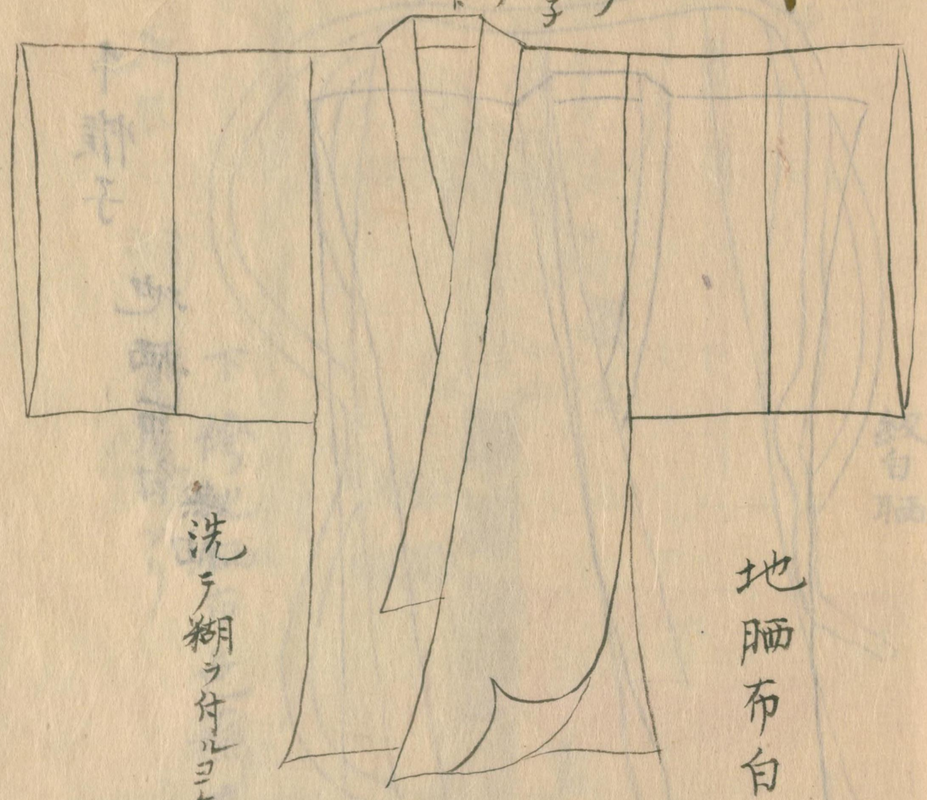
左ハ左ヲ上ニトヂル
右ハ右ヲ上ニトヂル

括（クヽリ）緒（ヲ）



大帷子

三日襖（ミッカアヲ）ヲ付（ツケ）ル白浅子地（モン）アリ
奴袴（ヤッコバカマ）ト同キレ

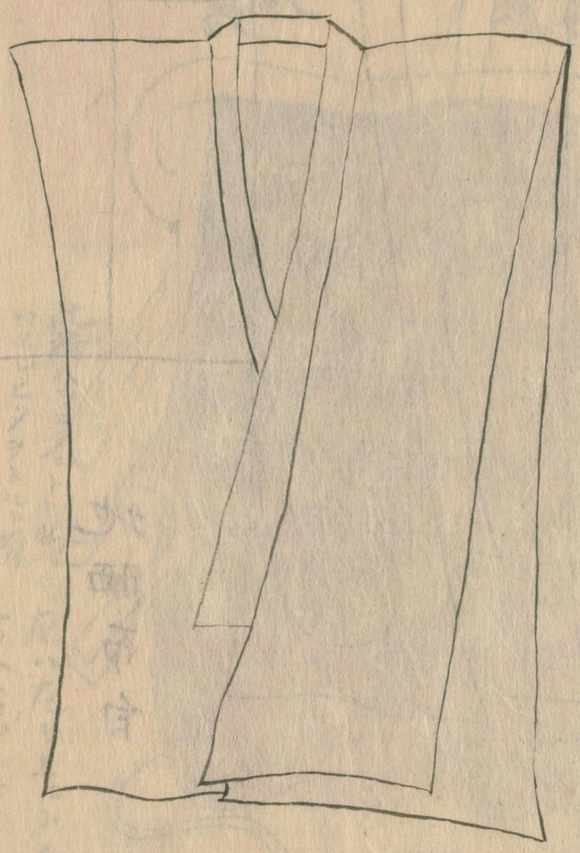


地晒布白

洗テ糊ヲ付ルヨケヒ不及

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

下帷子
地晒布白
無袖



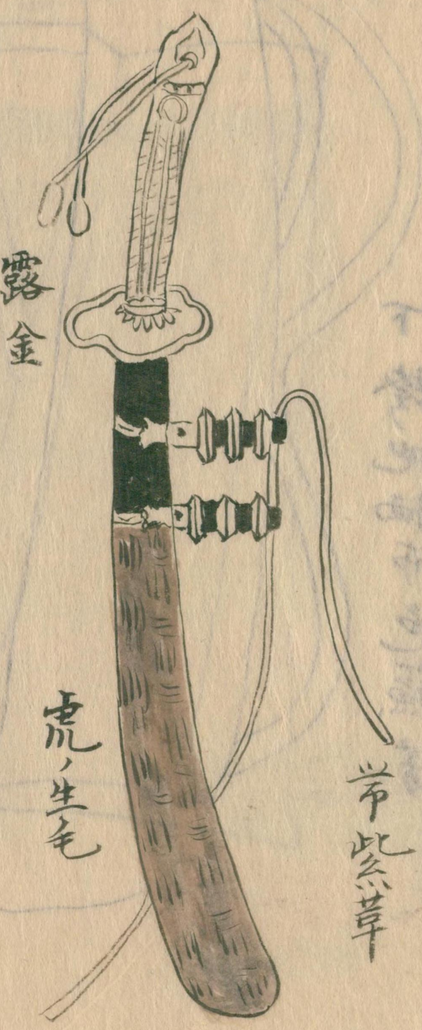
紋白晒

下袴地晒布色蕪、芳
前後二ツアリ

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

左

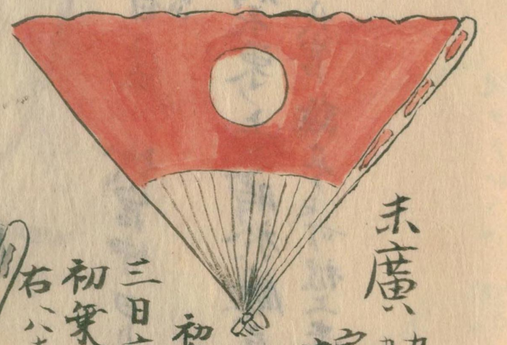
大刀　銀作滅金（メッキ）



左方
鞭　左ノ子ナ

此鞭今左右共箱ニナシ
鉛ニ貯持ニ可用

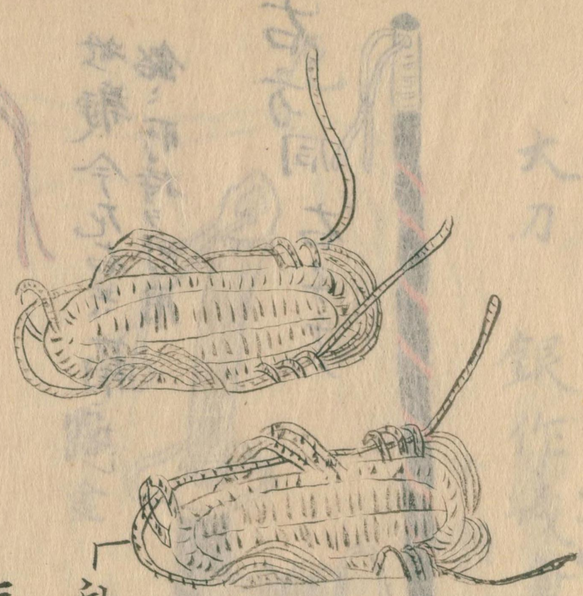
右方同　右ノ子ナ



未廣（カワホリ）ト云
蝙蝠

初來中門ヨリ人先行箱上袖載置ニ
三日饗屋ニテ饗東上ノ時
初參ヨリ左ハ黒方ノ扇
右ハ赤方ノ扇ヲ被渡ニ
依入違ヲ持ニ

右



ワランシ（カイ）
糸鞋ト云

綱之介定顯ノ生ル
的顯

五日潜衣束着後糸鞋ヲツクル
紐ノ括リメニ肘ヲツクル故ノ事トソ
廳屋座又馳後社頭ノ掾ニ上ル時雖為
兩儀糸鞋也若上ル右寛也

左右ニ同

紐

乱緒ト云　代官中ヨリ生ル

三日潜衣束ノ上之時於廳屋代官中ノ髻水
乱緒代官　誰ヲ可被上遣ヲ及披露

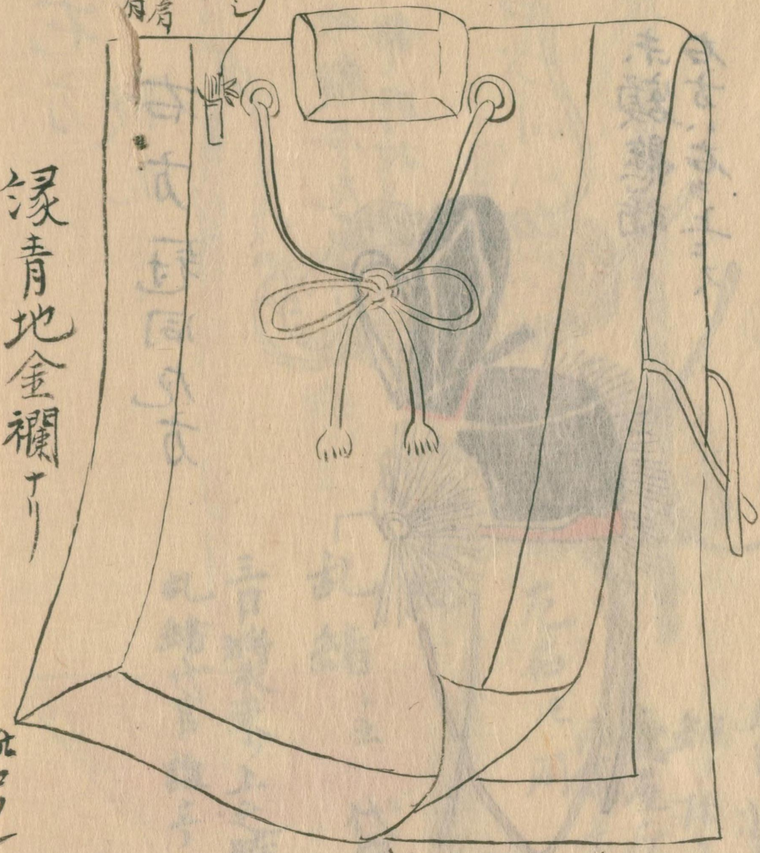
右方冠同左方

未顯懸緒
右方ハ右ヲ上ニス

右方

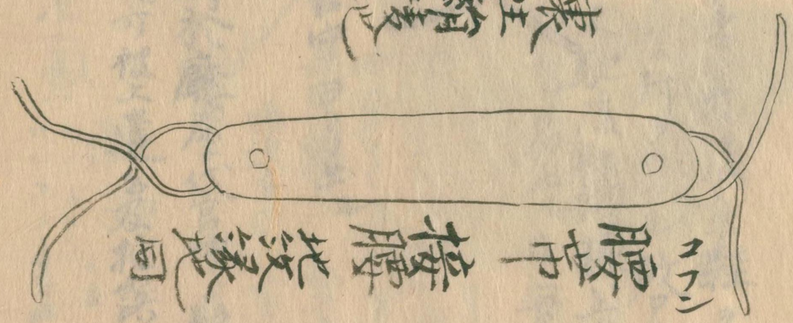
袖襠身青地織文
花輪違

取カワシ
菖蒲
左ハ左肩
右ハ右肩
付ル



浸青地金襴ナリ

表生絹裏ナシ



腰紐

接腰
共浸表同

コノフシハ金ランノカワリ

右方

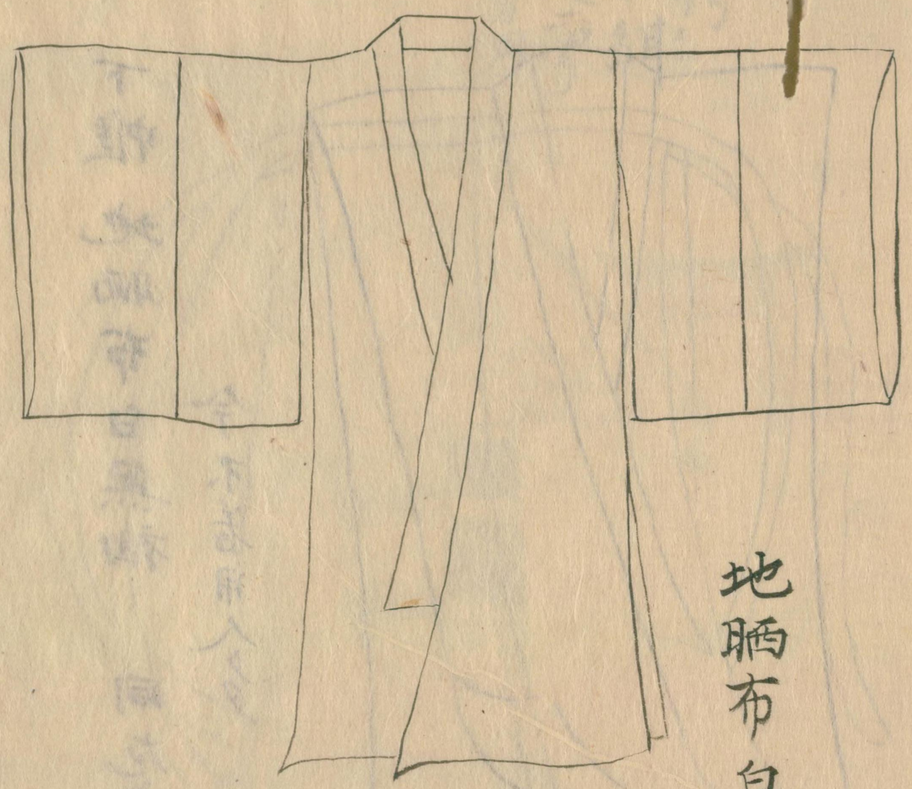
鉄袍 ニカユキ

黒紅梅精好
浸方袖左右
襴繪有

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

奴袴　色地文　悉同左方　ハツヒタトチル
右右方ヲ上

大帷

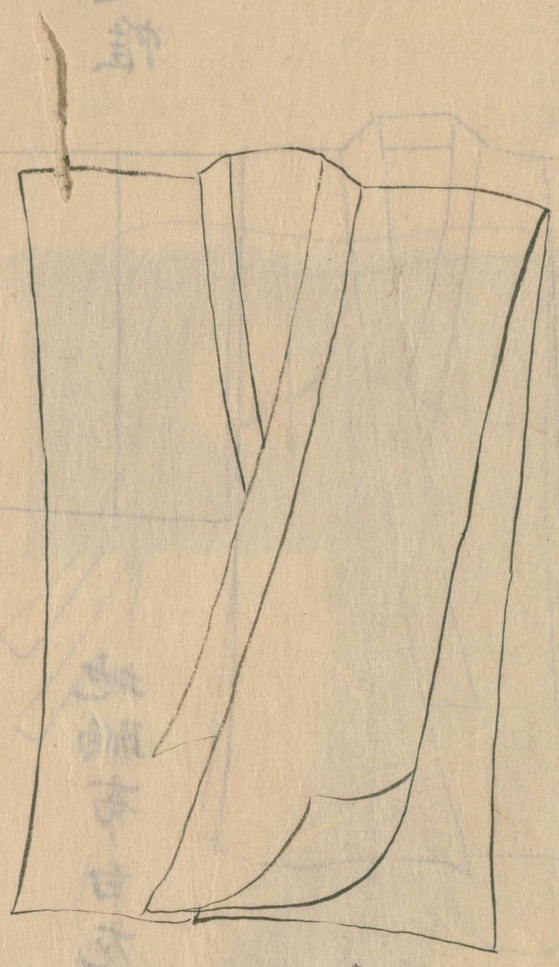


地晒布白左方同

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

下帷地晒布白無袖　同左方

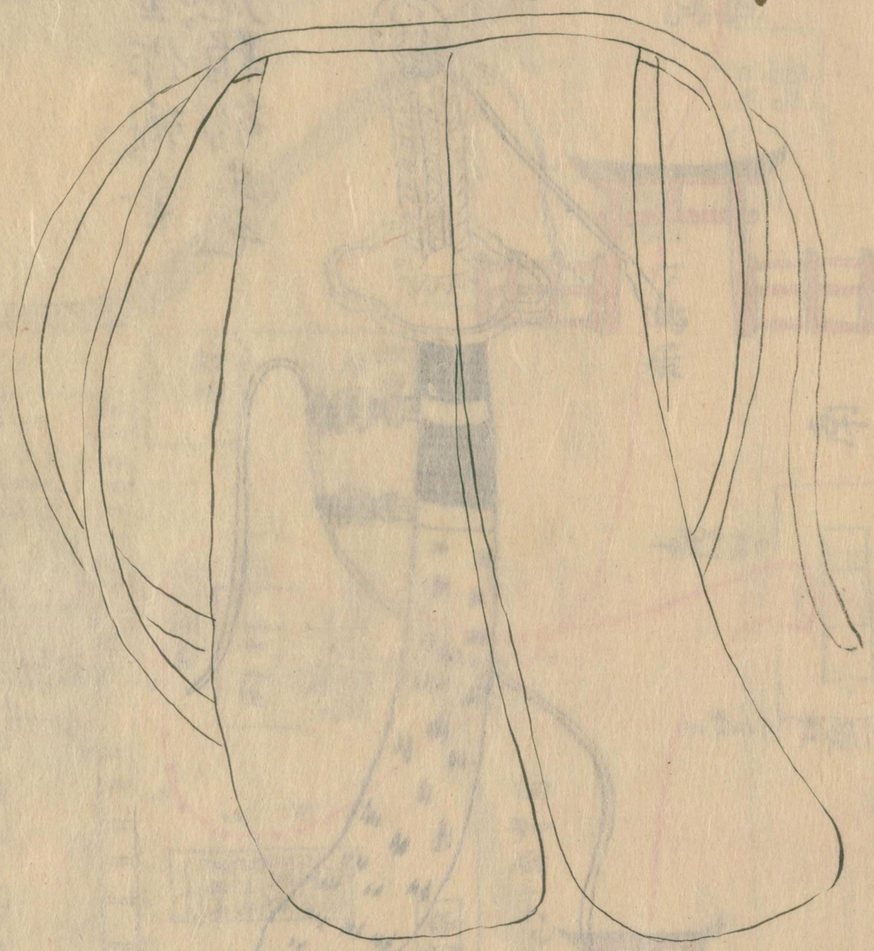
今不着用人多



下袴　イロ紺ニ

前後ニ戸ヲ

共左方同



国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

下鴨
置幣
左ノ
様ノ
圖

車

一ノ鳥居

経所
経所
雑舎

供ヲ
処ヲ

祈
祷
殿
幣
拝
殿

門

向
加
茂
社
ヲ

門

御
祓
屋

番所

社務所

舘

神饌所

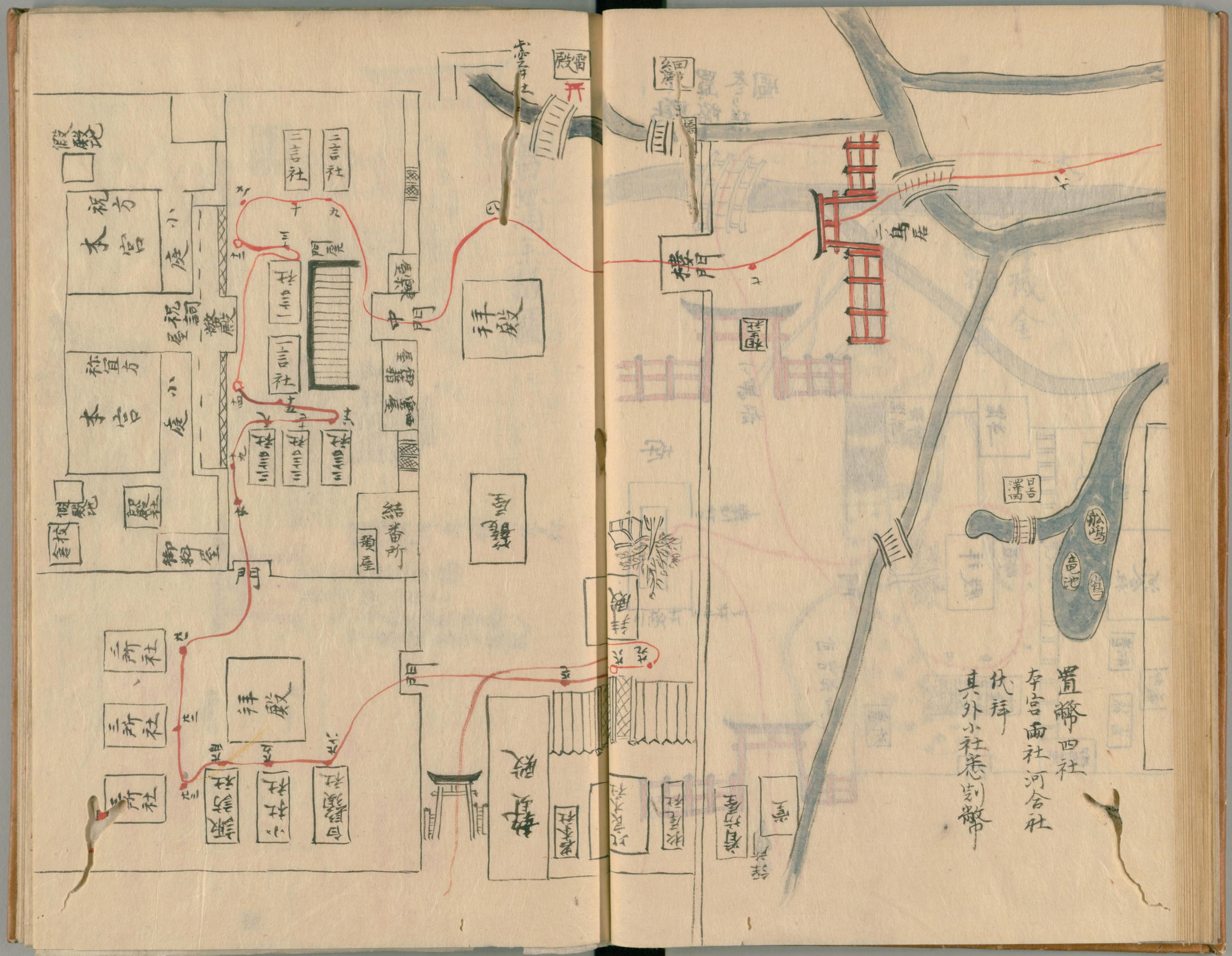
社務所

社務所

末
社

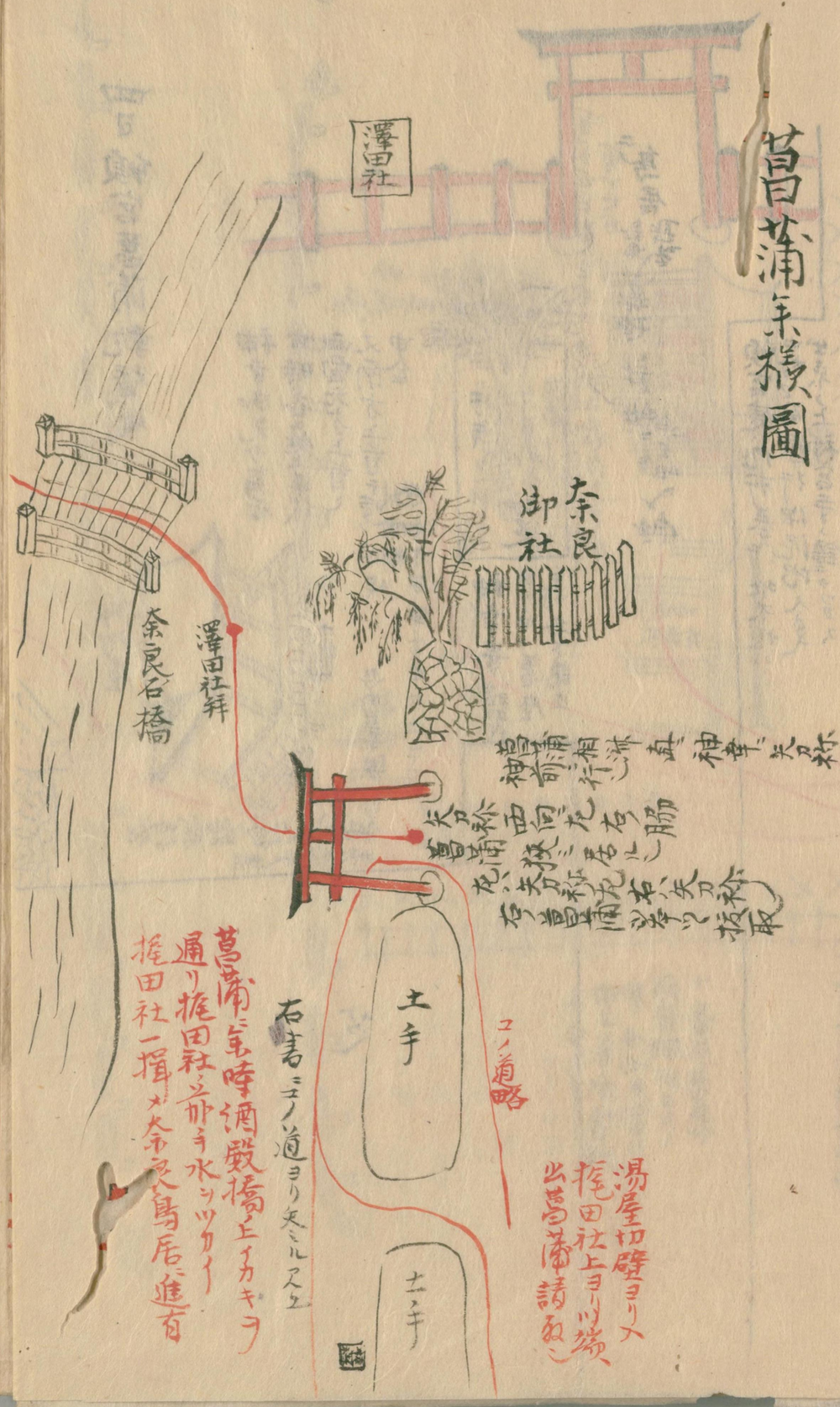
末
社

末
社



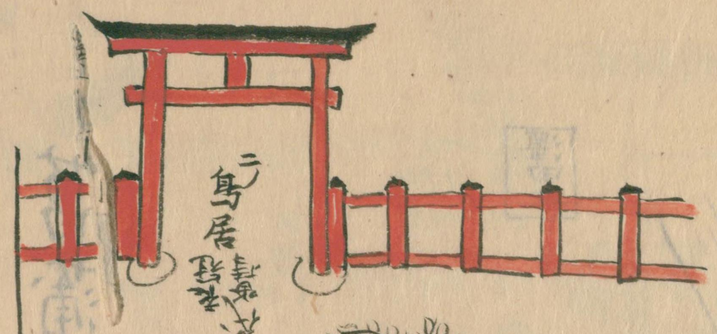
国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

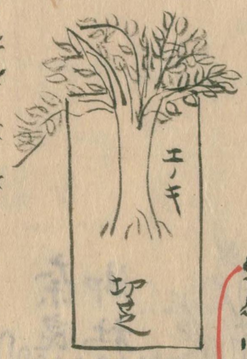
菖蒲年模圖



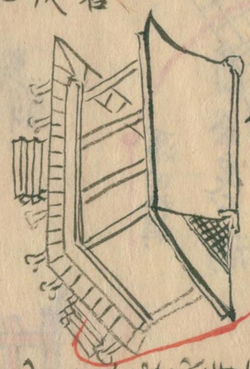
国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

四日頓宮菖蒲軌替圖



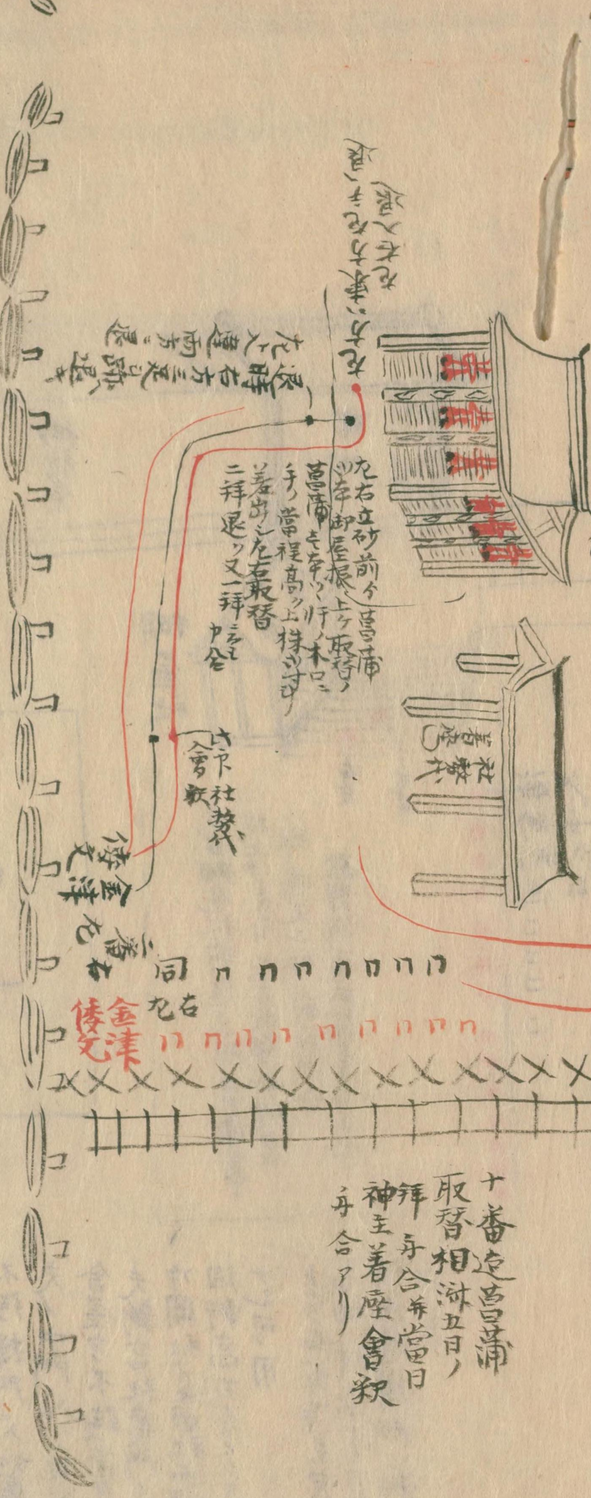


神幸御先ニ鳥居
申時各庭上平伏
西面北方上首ニ
又南方上首ニ
申合

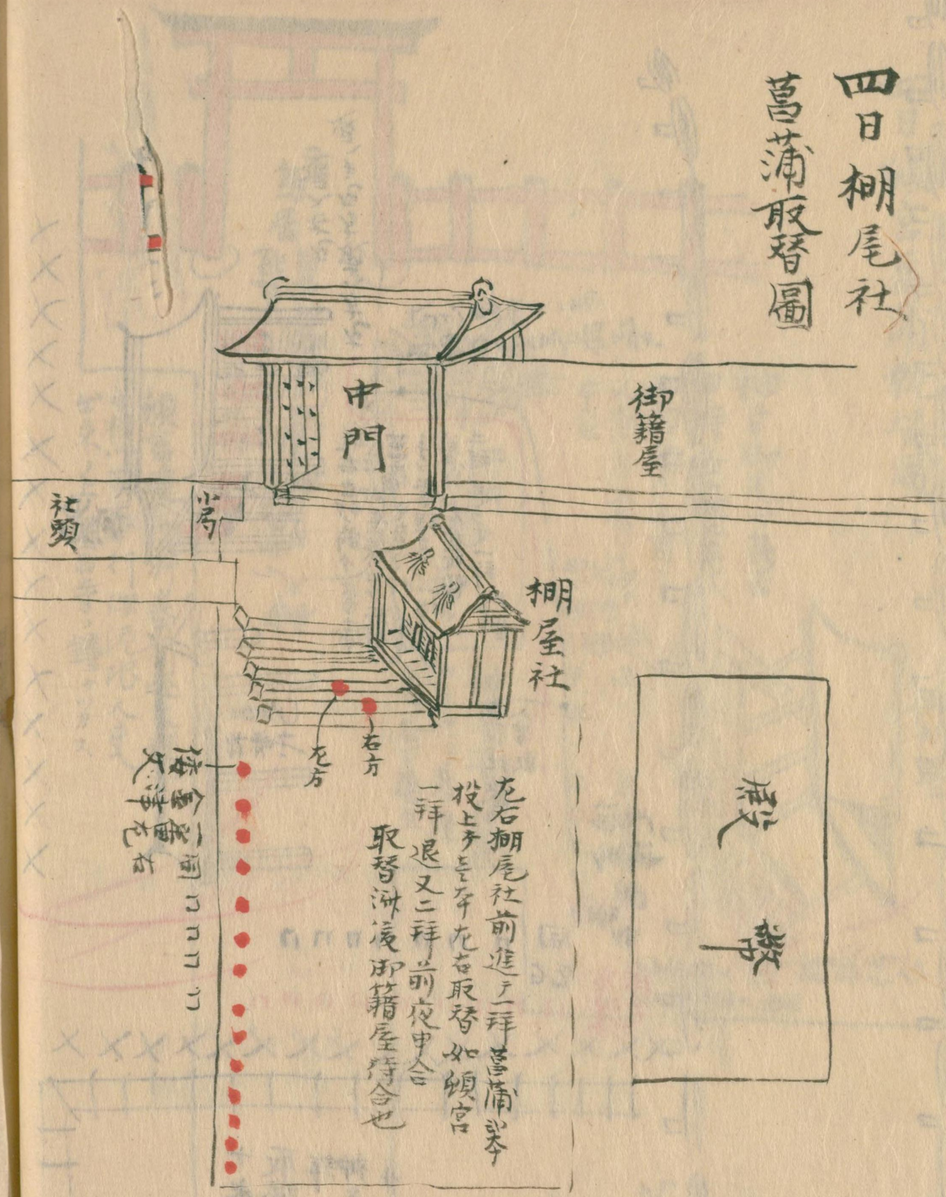


頓宮建ル祝所奉行牡木垣ハ
中村ヲ司奉行泥土ハ人夫
出来ノ上神宮寺ノ鐘ヲツカス

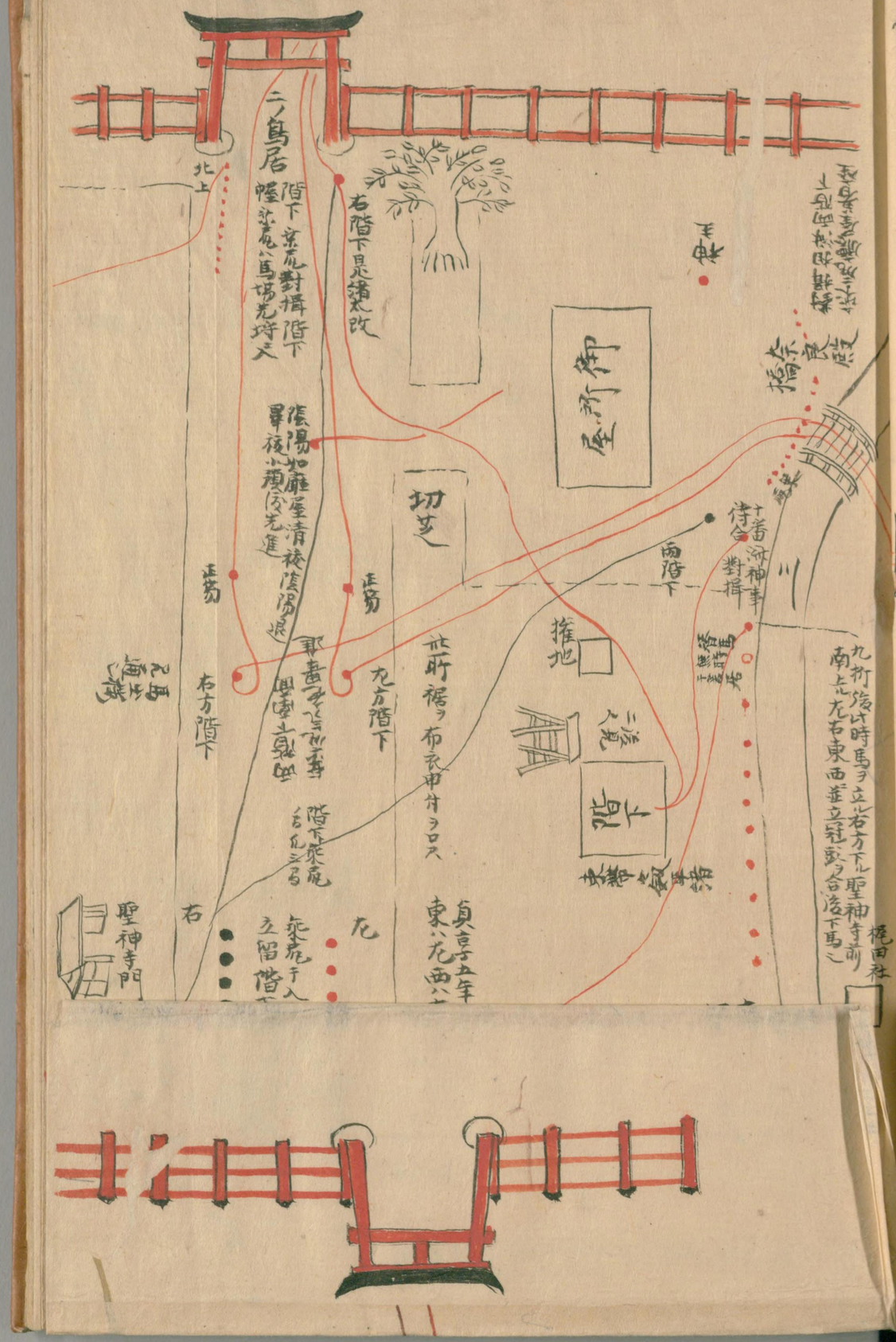
神輿畢テ於殿代
カリヤニ着座
手拭各下簾ヲ



四日棚尾社
菖蒲取替圖



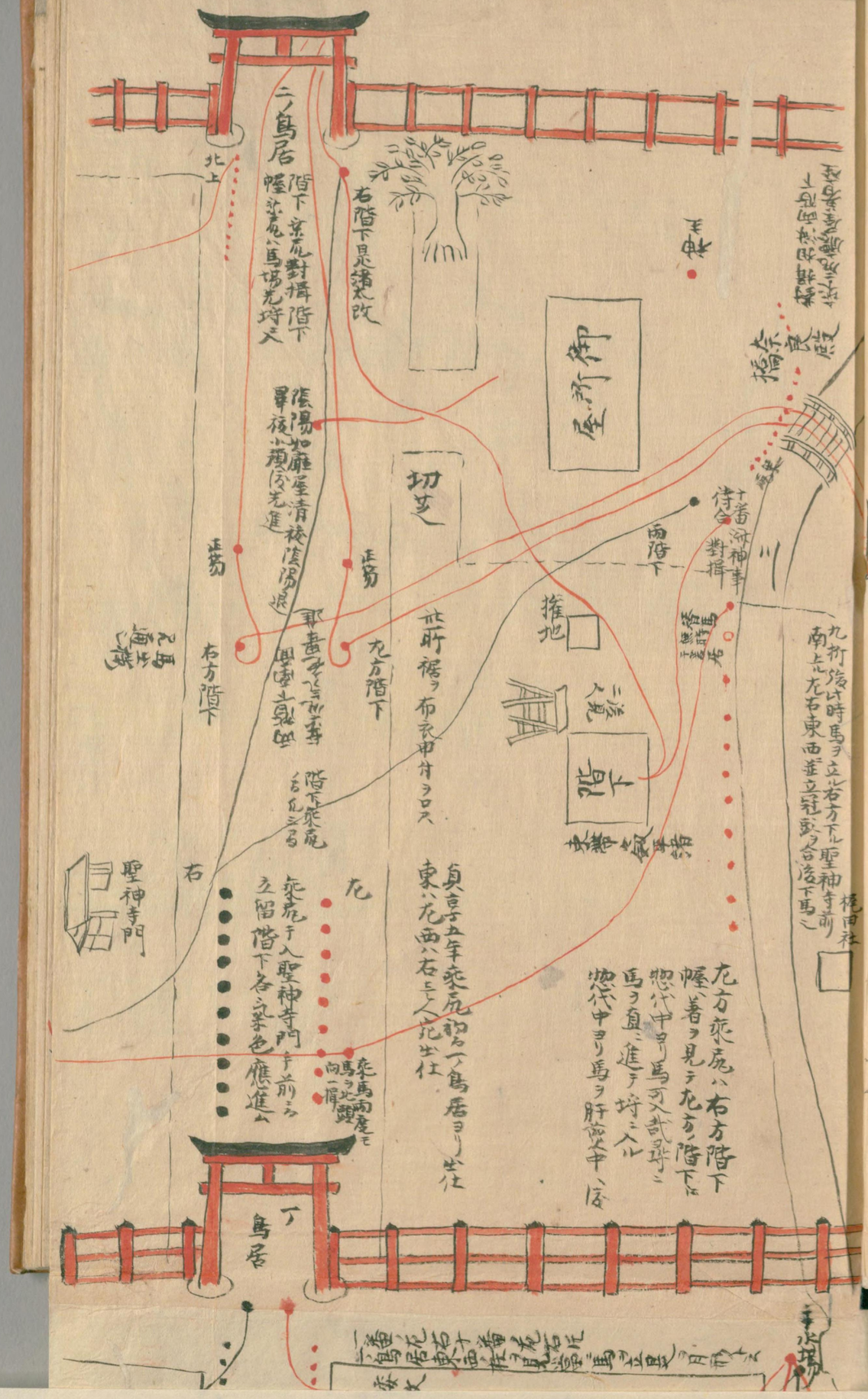
国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用



御馬ヲ清所左方手水ニ浄衣着手水ヲ掬右方ノ浄衣着
代官ノ浄衣ニ切倭文ニ扱帯ニ浄衣着手水ヲ掬右方ノ浄衣着
浄衣着右右相揃ヒ出来馬右ノ左ノ手水
浄衣着右右相揃ヒ南向着相揃ヒ出来馬右ノ左ノ手水
切倭文ヨリ手水ヲ掬右方ノ浄衣着手水ヲ掬右方ノ浄衣着
御馬ヲ清所左方手水ニ浄衣着手水ヲ掬右方ノ浄衣着

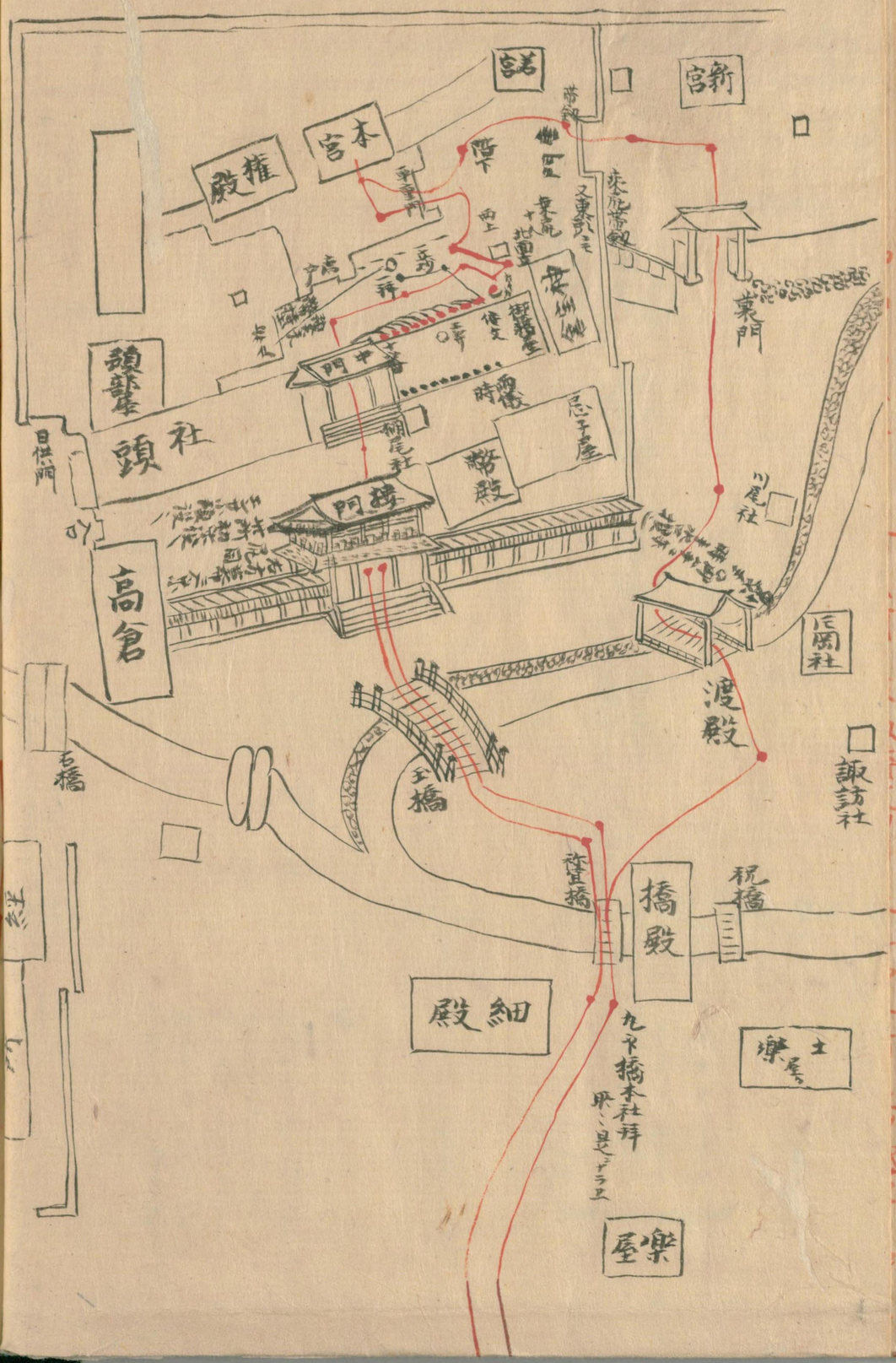
常居二手人着次ノ浄衣着
差数各頂戴次南階下出仕如圖
次代官通物ノリ次カテクリ通深陽ノ帯
次浄衣着南人切扱町出着府侍御馬ノ請ト
申ノ時左方ノ常居ノ上ニ列相揃ノ上ニ立倭文ノ
次ノ南次居ノ上ニ列相揃ノ上ニ立倭文ノ
町ニ出常馬左ノ常居ノ上ニ立倭文ノ
手水ヲ掬右方ノ浄衣着手水ヲ掬右方ノ浄衣着
拝ノ下所ハ是ニテラヒ
金津ハ奈良社ノ前横
拝殿北ノ方上リ北ノ口ヨリ
神馬屋
湯屋
壁
切
壁
切
牡所ニ馬ハ下
左右共口引
雑人馬ヲ追ス
切壁ヨリ外ヘ
心得事ニ
右階下
右形
右方ハ牡所ニ
口下馬スル左右
左今ハ大方西壁
ニ下リ

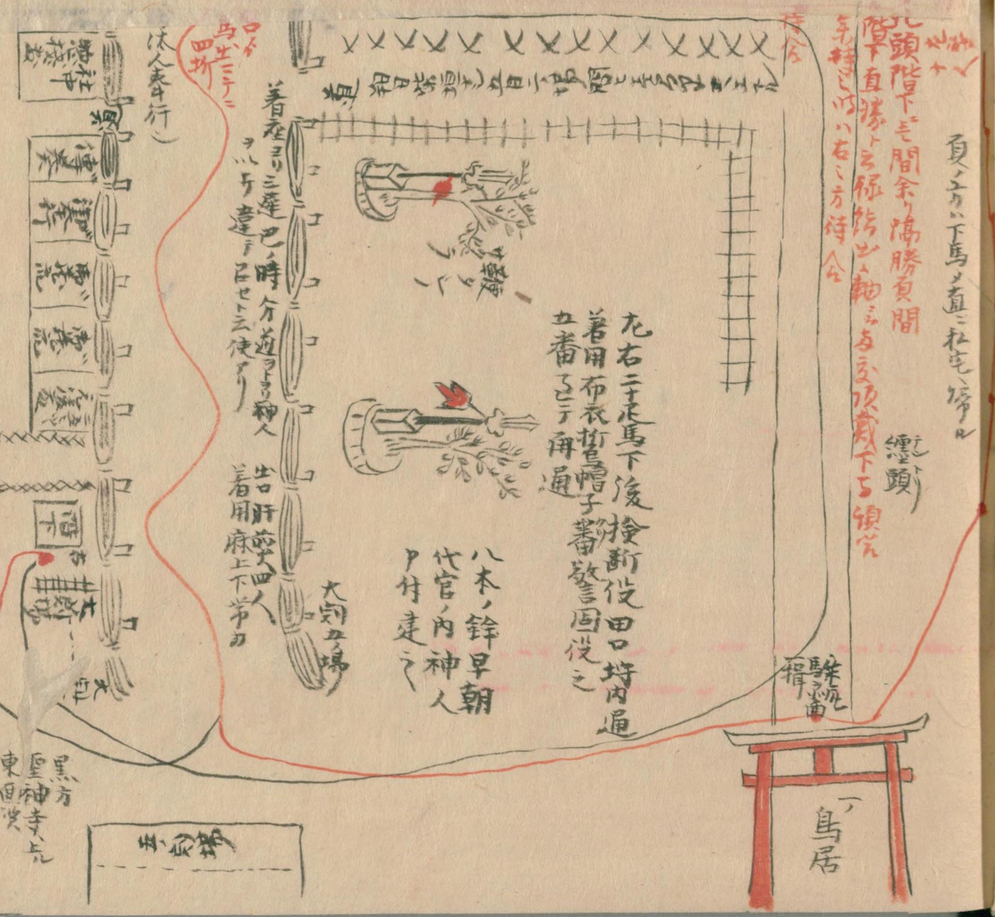
国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用



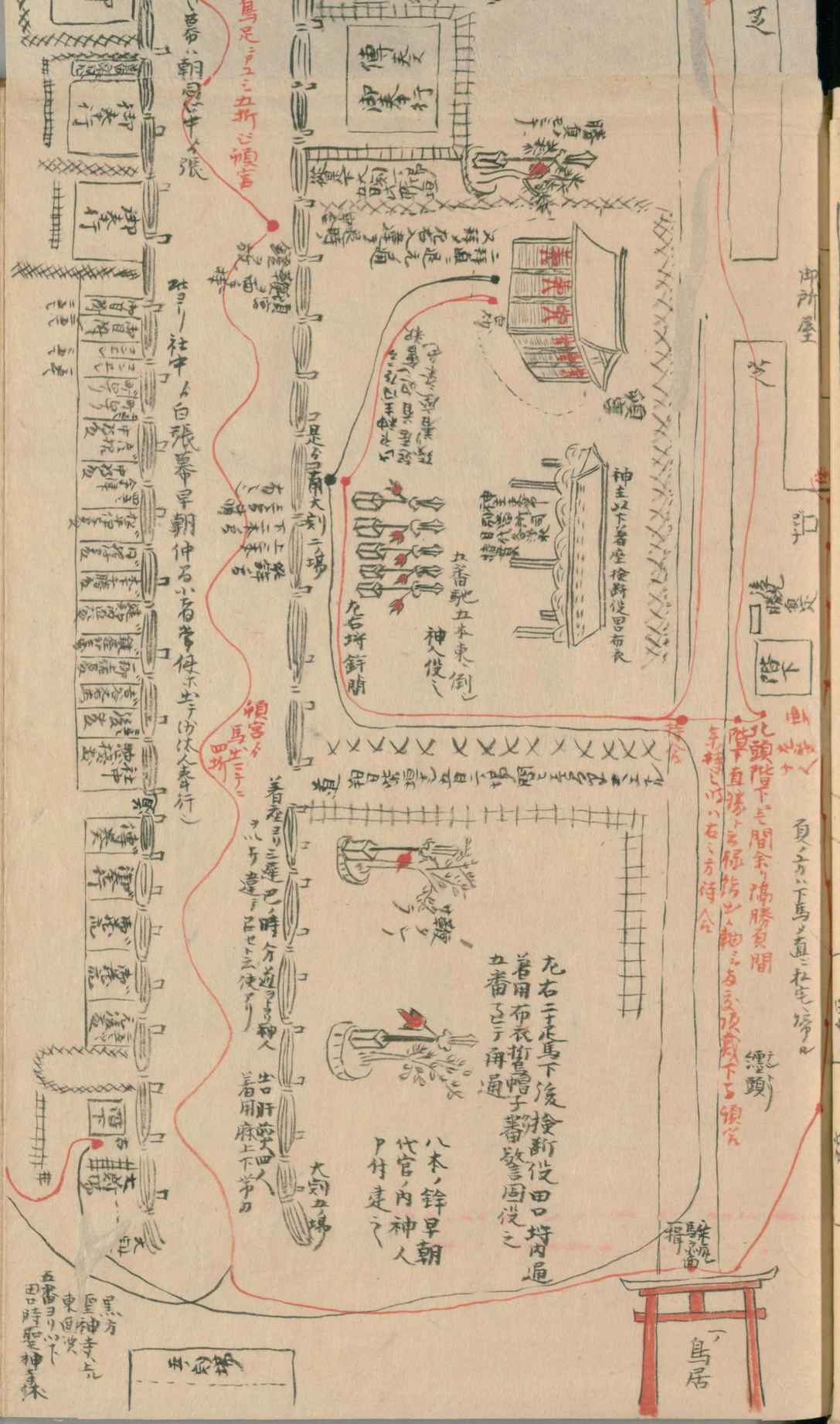
国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

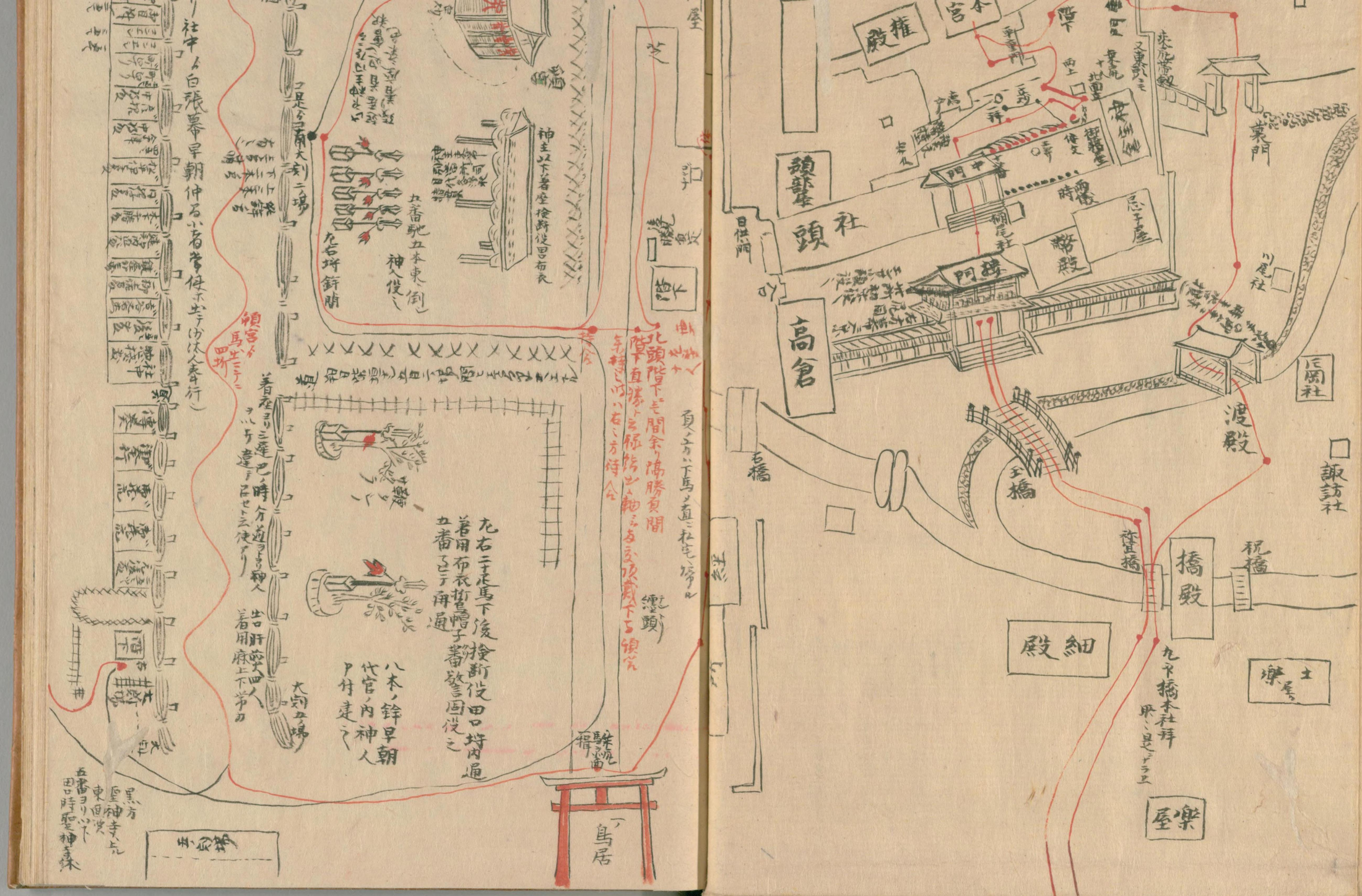




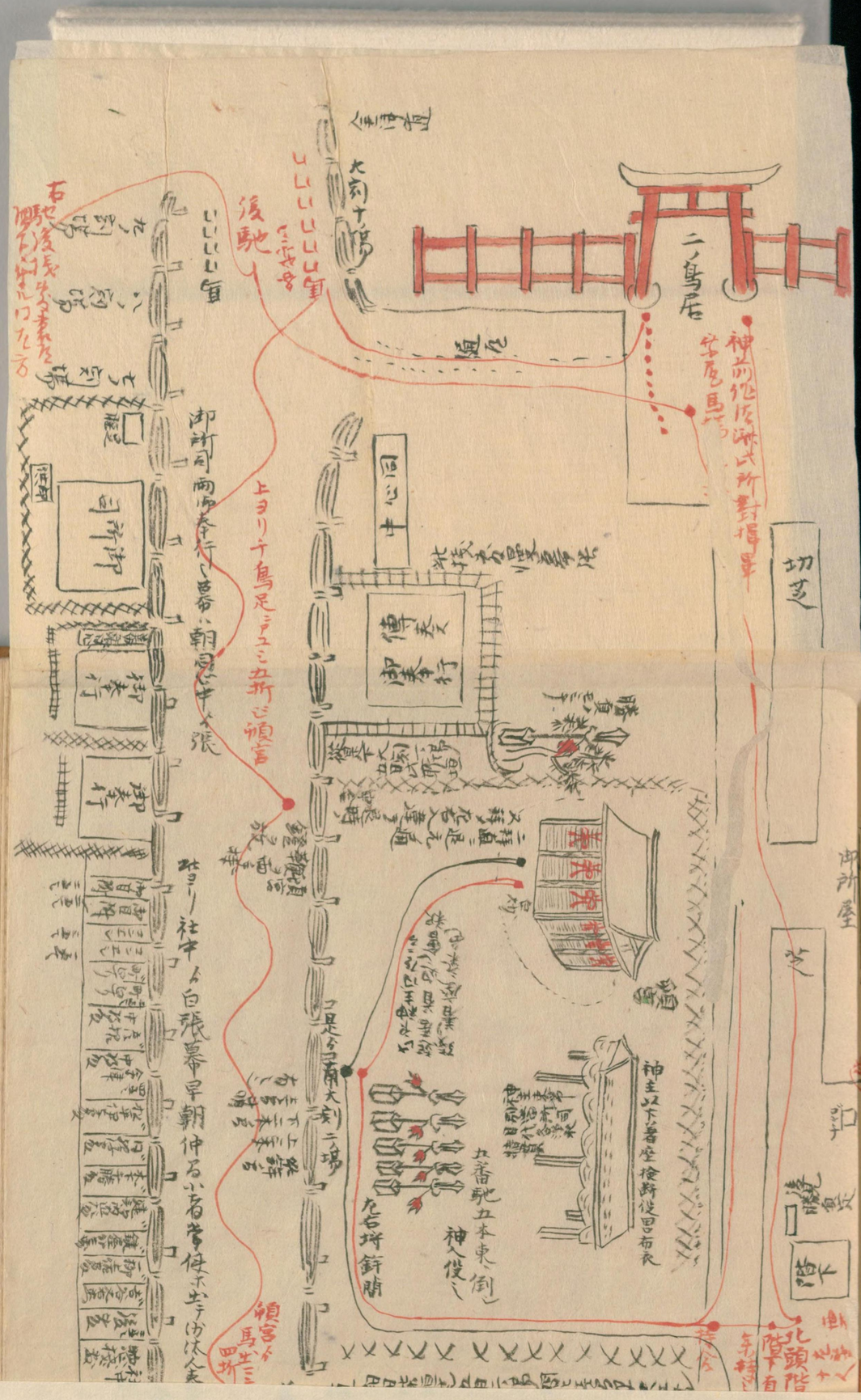
国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用


二ノ鳥居
大刻十時
御所
神主以下着座検断役四布衣
九番馳五本東へ倒し
神人役し
左右馳長ク書ヲ
御所
上ヨリ十鳥足ニテ二折ニ頒宮
白張幕早朝伸ル
社中ノ白張幕早朝伸ル
頭屋
頭屋
頭屋

一競馬或ハ流鏑馬ノ儀ヲ賀茂競馬ト称シ往古
ハ盛ニ執行セシ儀ニ候処近年ハ競馬ノ儀ハ
勿論流鏑馬ノ儀モ一向ニ不行届ニ相成候ニ
付テハ此度競馬ノ儀ハ一通リ取調ノ上ニテ
ハ成ル丈ケ往古ノ通リニ取計ヒ流鏑馬ノ儀
ハ当分ノ内ハ見合セ候様仕度尤流鏑馬ノ儀
ハ馬場ノ都合モ有之候ニ付テハ一通リ取調
ノ上ニテ無之テハ取計ヒ難ク候間此段モ
御含ノ為メ申入置候

一古来ヨリ賀茂社ニ相伝リ来リシ神事ニ
シテ今ニ至リ其儀ヲ失ヒ候儀ハ勿論ニ候
ヘ共其儀ニ付テハ種々ノ差支モ有之候ニ
付テハ成ル丈ケ往古ノ儀ニ立戻リ候様取
計ヒ候ヘ共何分ニモ年月ヲ経過シ候儀ニ
付テハ全ク往古ノ通リニ取計ヒ候儀ハ難
出来候間此段モ御含ノ為メ申入置候

一古来ヨリ賀茂社ニ伝リ来リシ神事ニシテ
今ニ至リ其儀ヲ失ヒ候儀ハ勿論ニ候ヘ共
御守札ハ勿論御祓ノ儀ハ従来ノ通リ取計
ヒ候様仕度尤御祓ノ儀ハ其時ノ都合ニ寄
リ取計ヒ候様仕度此段モ御含ノ為メ申入
置候

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

新社務所を左手元神
奉安所おそれおおくも
右拝殿両参進ら
第一長左図 長之左 第二
一冊沼田宮左イ和泉津
イ図清水 伊保左
第七 壬生図 前田左 第八
第九 沼津図 佐野左 第十
第十一 伊勢図 本荘左 第十二
第十三 八條図 名沼 第十四
第十五 和泉図 沼田図 伊田左
第十六 伊予図 第十七 第十八
第十九 信濃図 第廿 第廿一
右之左ゟ一ヶ条遵守
得共惟ニ右之ニ左ニ而社参
因ニ而ゟ利ニ而ゟ
急ニ参詣の事
再来二月御祓ゟ御神事
祈念ニ而遂ニ
一阿上ニ 八村 一大宮ニ
一中村ニ 宮村 一岡ニ

長谷川図 伊田左
第廿二 伊予図 第廿三 第廿四
第廿五 信濃図 第廿六 第廿七
第廿八 伊予図 第廿九 第三十
第三十一 信濃図 第三十二 第三十三
第三十四 八條図 名沼 第三十五
第三十六 和泉図 沼田図 伊田左
第三十七 伊予図 第三十八 第三十九
第四十 信濃図 第四十一 第四十二
右之左ゟ一ヶ条遵守
得共惟ニ右之ニ左ニ而社参
因ニ而ゟ利ニ而ゟ
急ニ参詣の事
再来二月御祓ゟ御神事
祈念ニ而遂ニ
一阿上ニ 八村 一大宮ニ
一中村ニ 宮村 一岡ニ

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

[illegible]
奉[illegible]
右於[illegible]
弐[illegible]
[illegible]
弐[illegible]
弐[illegible]
弐

[illegible]
奉[illegible]
右於諸国[illegible]

第一美作国 倭文庄
第二播磨国 安志庄
第四[illegible]
第五伊賀国 福田庄
第六[illegible]
第七[illegible]
第八[illegible]
第九[illegible]
第十[illegible]
第十一[illegible]
第十二[illegible]
第十三[illegible]

加賀国 金津庄
土田庄
美濃国 [illegible]
[illegible]
宮川庄
[illegible]
[illegible]
山田庄
[illegible]

第十五 和泉国 [illegible]
第十七 伊与国 第[illegible]
第十八 [illegible]
第十九 信濃国 [illegible]
[illegible]

周防国 得地庄
玉井庄
[illegible]

右[illegible]
得共惟[illegible]
因[illegible]
急[illegible]

[illegible]
[illegible]
一河上[illegible]
一中村[illegible]

[illegible]
[illegible]
八村 一大宮[illegible]
[illegible]
[illegible]

三拾弐村内東小路十七村西小路
十村

一覚永六年
景乱由来附並之人数等姓名
二年之代之如件
一門十九軍
名字一行江洋義之如件
一慶安二年九月十一日
本院新院之院二位局
上臈殿始競馬有之女房
同伴之外之諸出筆
一貞享四年

[illegible]下平依左右共奉園殿御寄進之左
紀伊守久尚娘辰女寄進右方太刀左
時奈奉納之詞進之

一同五年

当年初二参詣左右二交代出仕之左才階下
東宇奉免之人充二行列出仕之神左ヲ
以下為上之
右階下西宇行列相揃
宇宙之神前進之宇西座着座

東ヲ上之奉免ノ外園座小代没官
輩初参申ス没官心

一寛文六丙申年

若狭天守当年没左右共御本屋葺状
机用机給之可差神事
当ト之

一奉免奉幣之節定夜六筆已安ノ者
左之

一年免神料之支元之奉免
分之人ニ三年奉納之

一奉免神料之支元之奉免
分之人ニ三年奉納之

一 神事ニ預ル者ハ其人有之候ハヽ少
ク共(ともに)ハ其ノ屆ノ上一人ハ勿論ノ事

一 神主禰宜祝以下ニ至ル迄不敬ノ人ハ
不採用ノ儀ハ勿論撰舉ノ時ハ其ノ事
ヲ元簿ニ記シ置キ江戸ニ之ヲ届ケ撰
定ノ上ハ速ニ其ノ事

競馬會依 内務大臣職務ノ
内ニ屬スル事

一 太永ノ年四月七日
從前ノ通リ御供時依 勅
六月朔日五月被執行
同依 甚雨延引之例

一 文明九年五月六日被執行
式日甚雨且宮司被申見合之
一 同十年五月二日足汰執行
朔日依 甚雨延引
近代自天文十年至慶元年元百七十ヶ年ノ
間ニ競馬ヲ記シ置キ候ハ

一 且行止ホ一ケ年も学しこれ
　　古キ
　　社記ニ
一 競馬ハ年二次ハ五月ニ次ハ九月ニ
　　行ヒ此神儀社記ニ
　　載ス
一 流鏑馬ハ年二次ハ五月ニ次ハ九月ニ
　　行ヒ此神儀社記ニ
　　載ス
一 競馬流鏑馬ハ年二次ハ五月ニ次ハ九月ニ行ヒ此神儀社記ニ

一一番、アイヤケ故左京亮氏保
故但馬守備彦卿親父ニ而上
一女中サニ立ふ若一女申候不若
一競馬ハ神事故遊宴下申仁ハ
表代ノメ、如此面ニ社時ハ第百ノ
一同一番左ニ立ル駿子氏記事
セラレ候ヲ申賀ニ被ル事ニ
ハ、ホヤ又是左ニ於テナキ
ホヤ天正六年卯月十二日ニ
競馬芸事一座ヲ左ヲ右ニ
先例共有ニ
一競馬ハ所司長代ノ近衛使ト申由天正十六
年十月九日ニ妻ニ依テ自筆ヲ以
日附ニ依テ自筆前ハ
又ロテ字ナトハ神筆ヲ
別紙ニ有ニ妻見ヘ申候
一天下
千時祝ヲ共左京妻賀久
日大雨ヤ社ヲ兎ニ而
上木ニ尾ヲ掛ニ此筆先例有ニ

然ル処、式部代、平松台國兵衛ヲ以テ、
無詮ナル旨ニテ書ヲ以テ、
例之御所屋大形之時ハ御ヨリ
我ヶ由一件ヲ

一 天未

手時ニ而ハ不申候ニ付明ケ心ニテ天下礼ニ
参上之旨、御一上ニ而十足作事
一 持杭（延享年馬場上ノ畷ヨリ西北ヘ之場ニ杭ヲ打ツ）
（キモイリ）平右ヱ門天文十一年五月ニ決定

三番読先右大将兼清扶持負前ニ清秋ヲ相頼ト
種々沙汰有シサニテ負ニ一面定メ中ニ
追テ先ハ清扶ハヲワレテヲ遣ス
ニテ成シ前代未聞ノ条沙汰ノ限リ

一天正十二年甲申

刑司刑アサ輔一保宣ヲ召寄ヨ
読ル為御見物　親王摂御見
夕扶桑牧聖篇ノ儀御見
鍋子被参上ノ後御機嫌能

久清惟平源重茂ノ内ニ双ヲ差
ヲ取リソトヘ早速沙汰ヲ双ヲ
窺ヒ一ト一ノ間ニ長老ヲ許ノ義ヲ
上作ヘハ惟平負ニテ沙汰
ヲ保宣ヲ清久義ヲ負ヲ
扶負ニ作ヘハ一段御機嫌能
ヲ舞ヲ舞ヲ

一同十五年

刑アヲ通ル事有ニ
一人ヲ扶成ニ元只今ニ人
ニ人サス候ヲ安

一旧年
読ミ二書シ奉ル処ノ権令義久
天文一年ニ例有シ由ニ依テ
ミシ処ノ事ノ修ヤ否シ遣ス
一文禄二年
読ミ二書シ奉ル処ノ禁制ノ
吹毛ノ条々ノ事ハ
如ク従前ノ通浄衣着
御殿ニ於テ
仁無シ事ハ内々
義久近年
由ニ但
子細ヲ
別シ指
遣ス
ノ
ノ
ノ

後谷川境界代々定文十ヶ条之
一保元二年三月廿日
北野社競馬事於古近ノ一条
左右ノ筆尻名ヲ馬ノ毛色ノモ委書ナシ
ヤ
一安志ノ退将ニ及候ヲ就馬料我ト永代寄進
申候ヲ先年大閤様御ヲ被申候安志馬
所ヲ申候処ニ従大閤様ヲ一更御借ヲ
御返ヲ老ノ一旦我ニ返申候処天下外ヲ候ヲ

天正八年庚辰二月廿日

園供申候ヘトノ評定ニ無処老ノ一旦ノ評定ニ
従文ヲ安志馬ヲハ全ハニ
仰ノ角ヲ被申候ヘトモ旦ノ評定ニ
ヲ則後文ヲ申候安志ノヲ
共社御馬ヲ全ハヘ上被ヲ
仁ヲ信心兼ノ通リ候ハ共
宮内ヤトニ候ヲ被ヲ後文ニ
年中候ヲ新子ト後文全ヲ
御祝着由候 大閤様ヲ
一延宝三乙卯年九月廿日

一当社ニ於テ清保宗詮等ノ名代ニ儀ヲ以テ面会
詮等ニ於テ其外大作ニ名代ニ会候ト
被仰候儀ハ処ニ神社ニ
社家ニ於テ清保宗詮等ノ名代ニ会候ト
奉行所ニ於テ清保宗詮等ノ名代ニ会候ト
文言ニ於テ清保宗詮等ノ名代ニ会候ト
於社家ニ於テ清保宗詮等ノ名代ニ会候ト
伝之ニ於テ遠孔病気ニ付代官ニ会候ト
別紙ニ於テ清保宗詮等ノ名代ニ会候ト

右ニ於テ清保宗詮等ノ名代ニ会候ト
御奉行ニ於テ清保宗詮等ノ名代ニ会候ト
被為ニ於テ遠孔病気ニ付代官ニ会候ト
社家ニ於テ清保宗詮等ノ名代ニ会候ト

一傳文兼田神日吉日向ニ於テ清保宗詮等ノ名代ニ会候ト
ニ於テ清保宗詮等ノ名代ニ会候ト
於ハ鍋毛馬ノ名ハ小堺ト云
替ハ鹿毛馬ノ名ハ横川ト云

一三番太先当順式九保律代教
更ニ右ノ階下ニ於テ出手座
ニ当テ手番ヲ勝ヲ以テ
保ニ手ニ依テ及違乱告肝煎衆ニ可遣
ニ第九手ニ後階下ニ於テ
頭ニ能合九ニ於テ
第九ニ於テ勇角手ニ於テ
勇手ニ於テ
ノ無ニ得ニ於テ時刻ヲ
着座、等処ニ於テ一切保ニ
更ニ於テ無ニ真実ニ
ニ於テ代ニ
一二番九相撲ニ於テ軌式
ニ於テ太勝ニ但右ノ
一延享五年五月二日
出口行司金剛ニ
ノ変ニ手ニ
ニ返ニテ
返ニテ
返ニテ

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

一 先方事件勅答
一 奉祝詞座配之事 本殿ニ進
左ニ祈念之事 報告ニテ皆着新ニ大刀
常陸宮ニ幣使御差遣ニ階下御着座ニ
御着ニ及フ

一 一番左楓木前ニテ両陛下ニ奉拝
二番左ニ万セン両陛下ニ奉拝
持尺 番ニ外十番左ニ
持尺無持尺ニ

一 天和二戌年五月
五番左若狭守 奴 事ニ
ニ由ル神人 階下刑部
事保可之段ニ 庭ニ不着事

一 先年当社傳奏 并雑掌御使ニ
神主階下ニ 輪番
共ニ 方 神主ニ 階下
年ハ 者 処又 事
神主 社家 処 先事
由ニテ 階下ニ 拝

一 元禄十七年七月朝
安志ニ而ゟ土田馬ゟ鵜飼
傳ゟ使ニ而ゟ伊兵衛ゟ代
幸ゟ社紀祥ニ而ゟ伊兵衛ゟ
一 安永二癸巳年七月廿日競ゟ
傳文馬祈ゟ代幸井大炊ゟ
年ゟ祈ゟ祈ゟ代幸ゟ
祈ゟ代幸ゟ

一 当年祭礼馬依病幸稽ゟ
代官ゟ而代官中ゟ沙汰ゟ
神前ゟ拝殿ゟ
代官中ゟ
当年祭礼ゟ
大前ゟ而ゟ
一 ゟ馬正装ゟ例記置
元保二卯年七月廿日
安志新宮社ゟ
幸ゟ而ゟ
沢村ゟ之ゟ

代官中書御案文之人（伊奈）
届ケ之
一
常尾於乃人指出之馬
一元禄二己巳年五月朔日
宮川馬筆無之出来尾
一疋ニ付江戸ニ而十両ニ
可売旨大ニサカリ来尾
一
一真享二乙丑年五月
朔日ヨリ切レ出来ニ而
可売旨定ル

一右境真享元甲子年五月五日
新田代福葉井境ニ於江戸ニ来満ル
長安元年ニ而
一
二階下ニ而
安永二巳年五月七日ニ
及九久ニ及江戸ニ而
彼ノ年ニ送ル月書
一安永四未年五月二日夜
二重ニ而来尾ノ俄ニ
仮屋ニ而六代社家和泉

一 当年夏、若狭ノ六ヶ之雷ヶ
延保六年ノ例ヲ
早ク雷ノ有シ処ノ今
然ル所ニ
一 同年五月六日ノ勅使
御前ニ
陛下
御前ニ於テ
御前ニ於テ
御前ニ於テ

九ノ山ニ死ニ名住来田等
一競馬二十人ニ許而右先等
少人数ニ而神輿ノ内ニ有
本御中有之事
一同初ニ名代ニ而御在筆望停止
ノ儀ニ付近年ニ致比等ノ体
ニ而ハ有之間敷事
右之通ニ候ニ付而ハ今度ハ
名代ニ而ハ不参有之
尤ニ候ニ付而ハ後日ニ
為ニ一札如件

元永十年三月

近江守判

右元永ト云事ハ元永二年ニ顕
氏等順直ニ人従等ニ而
許諾ニ付而ハ後日之
未聞ニ候ニ付而ハ後日ニ
為ニ一札如件

元永十九年
三月十九日

近江守判

一優文頭六十ヨリ前ハ馬有之時ハ
奉牧ニ成トモ然時ハ
習トモ

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

一 檜木ヨリ并笹馬有之候ハヽ
馬入申し

一 七ツ口降(下ニ)不会ニ而出候時ハ

一 檜木ヨリ来ル笹馬有之候時
借階ヲ、茶ヲ(ん事ニ)若客
笹ニ而有之候ハヽ 禰宜方ニ而
も茶銭ニ而も 来ル時
代ニ而、乗ニ而ハ差障ニ
候ハヽ

一 知ロ毛附ニ候ハヽ 太鼓ヲ不打入申
候ハヽ 時馬ニ乗レて他馬ヲ
借階ヲ、茶ヲ(ん事ニ)若客
笹ニ而有之候ハヽ 禰宜方ニ而
も茶銭ニ而も 来ル時
代ニ而、乗ニ而ハ差障ニ
候ハヽ

寸ニ馬ニ乗ル而ハ不苦候ハヽ 代ヲ取
申ニ而ハ不苦候 馬ニ乗ル而ハ代ヲ取
廿人ニ而ハ不苦候 馬ニ乗ル而ハ代ヲ取

一 但シ馬ニ乗ル節ハ新ニ
上意ニ而ハ不苦候 馬ニ乗ル而ハ代ヲ取

一 此ニ而ハ之節ハ新ニ
之ニ而ハ不苦候 馬ニ乗ル而ハ代ヲ取

一 天明二年五月廿日

馬術ニ代ル事ニ而有之
由ニ付　右之通ニ而差
一　寛政十年五月二日
四番衆ニ而御拝領菊作
文代ニ而差役ニ付
席衆ニ而差出候
一　五月五日早朝ニ
人ニ而大田ノ方ニ向ケ
右ノ人数福徳社ノ辺ニ
右ニ而差図有之候
一　右ニ而差図有之候
一　文化七年五月三日
信濃守殿ニ而人馬
七ツ半ニ而被帰
御襖体ニ而退出
内相談ニ而有之

お届候

文政二卯年九月　従西條下賀茂駿主受清

判

右祝競馬會奉獻記一冊為清覧

備用其門被出写畢

仁時

安政五年午二月

経啓

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

競馬會勝負并
異例之留

全

競馬會勝負并異例之留

競馬勝負之異例

儲貳之例

一 建仁三年十二月九日
御幸競馬十番

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

朱者直一駒主追加

競馬勝負之異例

儲負之例

土御門院御宇

一 建仁三年十二月七日北野
御幸競馬十番アリ
初勝落馬而負ル事

五番 左 院左番長養久清
右 右大將番長下野敦文
勝

久清歌ヲアナツリテ遠ナカラ追テケリ敦文カ馬早
シテ勝ニケル程ニ鞭サシテ勝負ノ杵ノモトニテ安

ニ直一
雖為考集恐遺例
多欤追而可考加

場ニテ見返リタリケルニ久
ニ手ヲ掛ケントシハ敦文落テ久清勝ニケリ
同上
一 義元ニ年ヨリ三ケ年之間新日吉ノ
敵ニ被落頁事
二番 左 左兵衛尉大江高遠
右 右大将下前佐伯國文 勝
一
ウチハカイテ國文追テヤカテ高遠ヲ取落シツ
高遠ヲケサ(仰様)ニ國文カ馬ノ手綱ヲモカイクリテヒザヅキ
タリケルヲ國文カ馬ノ手綱ヲモカイクリ押ハヅシテ
クツハラモカイナリテ走リ勝ニケリ高遠ハ空ヲキクツ
ヲモテテ馬場未ニアリシトシ

競馬記
一 天正十五年五月五日
三番 左 駿河守信久
右 佐渡守保数 追
共ニ落馬早ノ業勝事
信久儲勝之処勝負之木ノ内ニ入ル二人共ニ落馬於ルニ
保数早ノ業馬ニ乗ル故勝也ト云々

月記
一 寛永十七年五月五日
二番 左 采女佑季文
右 刑部丞清吉 追
出ル口ニテ落馬不入直事
季文場ニ入テ其後馬可入直由ニテ馬場来ル馬ヲ

引き ストイヘ 氏 舎人 色と トコトハリ 幾度 ニテモ 得
示(セ)ラルヽ トテ ふ条 清吉 人 駈ル 仍テ 季久 夏ニ 成ス

季久之馬ハ正親町三条殿馬也是ハ龍ノ御馬御預由ニテ忍テ
御借シ被下之由然ル間皆具ニ以下結講成ル事中ノ日ノ競馬ニ
彼也ホ足第一ノ馬ナルヲ如此ニ〳〵

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

追頁之例

後鳥羽院御宇

一　左　院左番長秦頼次

敦近勝

逆馬場ニテ頁幸

番之時頼次カ馬鞭ヲ打ケル二

敦近勝ニ

競馬記

下一　天正十八年五月五日

七番　左　紀伊守氏長

右　造酒正孝臣

弓上

馬鞭二十足共一段結構近年ヶ様之事無之

西國衆京御留主衆ニコウ衆之御馬鞭也ト

開白殿東國御陣之御留主ニ

民長之馬逆馬惰之走り季臣走り勝劣而
民長猶之ル

日記
上一 永祿三年五月五日
鞭歩後落馬入直支
七番 左 大膳亮季德
右 兵部丞誰
季德追馬鞭歩後落馬入直ス支不審ニテ
私云 可為負鞭歩後落馬入直ス事不動之至也

一 寛永元年五月五日
五番 左 左衛門大夫保政
右 主殿助成秀
成秀内馬也鞭モ不合故ニ階下ヨリ今一度可被
入直由雖有使成秀罷立亭ヘ被帰之ヲ負ノ分
ニ成ナリ 左衛門大夫馬上十九ヘシ
走ル九ヘシ

一 寛文元年五月五日
六番 左 伯耆守周顕 依合声而独走為勝
右 越後介氏孟 居負最下知ヲ弘基能ヘシ
八番 左 木工助氏繩 遅而負脱冠故弥負トスヘシ
右 豊前介水直
居負之事
脱冠負之事

一 同五年五月五日

追負而不為負事

二番 左 逢殿允保福

右 兵部權少輔清邑 追

儲負ニ不為負事
但儲負之部ニ可入ケリ

八番 左 大監物氏金

右 逢殿頭季弘 追欤

後闇双馬而勝負之樹辺ヨリ走出右按出然ル処合策故
可為勝処再言依断入直右独走左居負然ラ尤不為負之
欤ノ塀ヲ走事
清邑氏金之不超勝負、按下之儀又鎮頭之西塀之先走雖
有再三断可為負之右例也然ルニ三人倶連廳屋座事
畢竟階下之謬不可有所遁之風聞也ニ〳〵

一 同六年桑尻中評ニ去年清邑氏金之両馬不走猶之
而若庭屋座右今之悪法也於當年者急度可令勝負
階下後見始而頼事
也真上對階下而口論之儀可為恥他見之処也然ル所ニ
馬出ル始而雇事
四人可頼也トテ虎頭保光清邑清弘被頼
次惣馬之籠者両人逆桑尻中令備 同年町幸松ニまし両人ト
勝負不別事
八木老斗被遣之〳〵
左追一 同十一年五月五日

二番 左 西市正福久

右 逢殿允保福

左遣少例而先駈ス去共不
盃可為勝之新也右者遣
例ヲ思ヲ扣ル仍断数言
アリ依階下新筒而不為
負如何雖然大而故無事
ニ〳〵若座于廳屋ニ〳〵
同ク違欤

左福久頓宮前之埒ヲ仰右手綱ヲシメエヘ超埒而着座之前
馳入即落馬右モ續ヲ入去ル不落左西ヘ控返而直ニ馳ス
右續出スト云ヒ數回遁ル尚右頁之由右階下ヨリ使立ツ右
階下答ヘ埒内ヲ落馬之人勝トヲ妥珍シ自ハ不可
負ト云ヘリ于時少有断無事

異例

順徳院御宇

一 建保五年新ㇾ吉糸五月會ニ
新院番長桑頼峯
府生 桑武隆

仕フニツリケル頼峯追フテ勝ニケルカ 馬場末
ニテ落テ死ニタリケルヲ帥筝ハシリテ父頼武カ
桟敷ニ依イケルニ先生殿ノシナセ給ヒテトツテタリケ
ル頼武カイテステ依ヘトイヒタリケルニ又下人ハシ
リテイキイテサセ給テ御冠ノヒシケテ得ニイラ
セ給ハヌトツケタリケレハヲノレラカフレルホウシソカシ

トイヒタリケレハスナハチ下人カフルホウシヲヒキイ
テ逃喰ケテイケリタルイミシウミヘケリ

一永禄元年五月廿日
七番　左　出雲守民友
　　右　内蔵頭孝継
伊勢守十郎殿御馬小鹿ト云（仁東寺ノ遍照院ノ馬芦毛也ト云）
民友為馬ニテ馬取ニカシオ十番ハテ、馬場ヘカケ入
テイカキラ乗越ルコト鳥ノコトシトソ

鐙摺リニテ走事
一天正二年織田弾正忠平信長ヨリ御馬九足出ル内
二足信長御馬也太田又助殿御奉行ニテ御子息
御チヤセン殿御見物御急キニ付一番ニ二遍仮テ
残リハ鐙スリニテ走ル三番光久保朝ハ鐙
スリナレハ勝負アリ

一慶長十五年五月廿日
四番　左　大隅守保幸
　　右　常陸守内顕

負而廣屋之座可着由争事
内顕儲出口ニテ落馬皆待保幸之勝之処内顕馬ニ
乗場ノ内ヘ引帰リ馬被上廣屋之座ニ可着由内
衆其外見負ノ衆雖被申負ニテ廣屋ヘ着之例是
昔無之然者保幸モ可被帰由申仁モ有之保幸者

勝而歸ル事有之義ハ食議區ニ也然ル而子預ノ酒モ不通社務モ不向ニ付葉屐モ下向也仍五日ノ酒
五日ニ晩ニ廣屋ニテ遍ナリトモ

雨天草鞋ナカラ着座事

一八十七年五月五日大雨左右共即所屋ヘ着座左東
右西社務、葉屐ノ礼草鞋ハキナカラ屋ヘ上リ左右
共ニ礼アリ天文五年ノ例ニテカセテ如此其上往右ノ
例モ有之ト

落馬即死事

一元和八年五月五日六番之左次路守氏成馬場末ニテ
落馬即死往来田十五年毛可取之訴訟雖有之不叶
惣中ヨリ三石奇進有之 但天正十年季持之例トシ

神主出仕見合セ之事

一寛永六年五月五日家屐屋ヲ出ル之処神主
十樂寺門近出仕然ル処葉屐ホ足ナカラ通ニ其
後神主出仕ス 神主森用久

月日

歩ニ而祿鑓頸事

二番 左 和泉守保永
右 筑驛守清賢

保永東之埒ハヤニテ落馬夫ヨリ常ニテ階下ヘ
被行祿鑓頸ホニテ階下ヘ付ル(例)度ニ礼ス

落馬後日死去事

一慶安元年五月五日一番右伯耆守時久落馬ニテ
イタミ馬場ヨリ本性ニ不成六百ニ死但馬守將顕モ
朝日ニ落馬ニテ二日ノ夜死去故五日ノ友直代ニ被ホ

二人十カラ十五年毛被遣ヲ
一 兼應三年五月五日
二番 左 米女佑保董
右 右近將監親父
歩ニテ祿纏ノ事
左右共ニ落馬也親父之馬主腰立ニテ馬辜帰ル仍
守ニテ祿纏頭前代未聞ヲ
負而頓宮、參ル事
一 明暦三年五月五日
四番 左 兵部權輔清昌
右 図書助保竹
保竹大ニ負故祿納ヲ押ヘテ不掛然ニ不負而祿可懸
由親類中左右之階下、雖被訴不叶然ニ押而頓宮、
參り廃屋座ニ着座前代未聞曲事ヲ
冠破損之事
一 天和三年五月五日
一番 左 内匠助孟平
右 和泉守定久
左稲葉丹後守殿御馬也孟平小土手ヲ撥倒故落馬
冠摧而不被用故着立烏帽子也皆人非例哉ト嘲笑ヲ
愚按ニ一有先例 建保五年賴峯神事自剋及ビ遅滞ニ臨時白丁烏帽子可然歟
宝永三年五月五日三番右内藏頭清文落馬冠破損ニ替り如何不知

一 正徳元年五月廿日

左 近江守保廉
四番
右 兵庫助従顕

左右共歩ニテ綟纏頭之事

左右共ニ落馬両人之馬放走皆雖相待不和行方之向
寄行ニ而纏頭畢 是非右伐ヶ猶之時ハ他之馬ヲ借
宗下一ノ有纏取右放馬入夜京寺町ニ而引帰シ

左右共堺内歩行之事

一 同六年五月廿日

左 主計権助 随李
十番
右 主税頭氏達

左右共ニ落馬ニ悪敷之由双方共ニ馬斗引上業届皆行ニ而上ル
トソシ

一 享保三年五月廿日

左 従五位上保富
階下
右 従四位下国顕

階下後見狩衣着用之事

右階下後見氏基 着狩衣

一 同五年五月廿日

借他馬ニ向于綟所事

左 隼人正聖顕
七番
右 木工允氏倫

左傳 養桟敷上ニテ落馬ニ損故假引上ケ借十番之馬
向于綟所ニテ

社記　千時神主　遠久三男　教久還補中

一　貞和四年五月六日社頭之馬場ニ而如式日十番之有競馬装束モ式日ニ同シ是ハ氏人中之立願ノタメ、元弘ニ往来田勘落之時ノ願也　社司之参随意也　装束布衣也　禄之役六人ツヽ、ミレヨウコニ人ツヽ八人氏人ノ輩而已ニテ台束帯也

一　文化八年五月五日大雨洪水既欲引橋依之神事被急一番斗三遍ニ而走之自二番至十番一遍ニテ走希代之例也　天正三年之競馬是可謂例歟矣

但催奉行ヨリ階下左方証跡、一番被番候得、被申入候得共、大ニテ八一遍ニテ成共有之後被番可然旨証跡ヨリ返答依之右之通決定致シ催奉行ヨリ菜屋中ヘ其趣ヲ入早

一番　左　主税清祈　依例勝
　　右　周防守芬証
　　代証千葉馬

従二番一遍ニテ走ル事　証千追加

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

代官後記

享保十三申五　神主重統代正祢宜保礼恭勤
一今ノ葉尾禄治之事　階下之侍素襖着取之事之中比ヨリ
社家上下ニ而清元ニ条々有之前ニハ一百姓ト云若カラヒ
役ニ而神主ノ階下ニ指も有之此一百姓ニ成
候度毎ニ記ニ有之候処ニ当成寿ニ先祖ヨリ百
姓ニ下ル云ヒ神主ニ取ニモレヌ又浪人ト下ル事ト九ケ
此ニ而中絶ノ今ハ昔ニ寛文ノ頃ヨリ
右之通階下ニ侍素襖ニ而有之由ニ然ルニ元
重統モ去年(巳)素襖之者ニ而渡ル処当年ハ素襖ニ着ヨリ
渡ル事由申ニ付ニ下ル

右者直一縣主之本令借覧之時潜写之同志之外不許他見

于時文化十二年　季夏

中大夫　従五位下

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

832
97
305

国立国会図書館　　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第12冊』　請求記号 832-305

ガラス使用